

念仏奉仕団に参加して

廣濟寺 福田慶隆

六月十七日(水)から一泊二日で、五位組念仏奉仕団に参加しました。五位組としての念仏奉仕団は今回で第六回目になるのだそうです。



清掃奉仕の様子

2015年
(平成27年)
9月1日

五位組だより

念仏のこころに生きる生活を

浄土真宗本願寺派
高岡教区 五位組

題字・織田隆夫

早朝に高岡を出発、大谷本廟にて納骨・読経の後、いよいよ西本願寺へ。西本願寺に着くと、全国からたくさんのご門徒が念仏奉仕団として集まってきておられました。

念仏奉仕団の具体的な活動内容は、西本願寺の清掃奉仕です。今回も初日午後と二日目午前の二回にわたって、国宝でもある西本願寺の清掃をさせていただきました。

阿弥陀さまのおられる阿弥陀堂、そして親鸞さまのおられる御影堂を、皆で一斉に清掃していきます。全員で三六〇名という大人数でしたので、他地域のご門徒とも「うちのお寺は：」「うちの報恩講は：」などおしゃべりにも花が咲きます。ワイワイと賑やかな清掃奉仕は、さながらご門徒同士の交流会のようでした。

清掃後は白書院にて西本願寺からお礼接待にあずかり、飛雲閣なども見学して、二日間にあつた念仏奉仕団を終えました。

二日目の午後からは、水の町である京都伏見を観光し、酒蔵を二つも巡って、楽しい中で高岡への帰路につきました。

西本願寺によると、このような念仏奉仕団の活動は年に五十回以上も行われているのだそうです。全国のたくさんのご門徒によって支え続けてこられた西本願寺。み教えを次の世代へと時代を越えて今まさに受け継がれているのを感じた、今回の念仏奉仕団のご縁でした。

第十一期五位組連研 報告

珉照寺 山岸智史

今年の三月にスタートしました第十一期五位組連続研修会(連研)ですが、順調にプログラムは進み、八月の時点で四回の研修を行いました。

前回は、宗教ということについて研修を行いました。話し合い法座では宗教についての活発な意見交換があり、そこでは「神や仏を拝んでも何も助けにならない」という被災された方の言葉が紹介されました。そこから「本当の宗教って何だろう」ということで話し合いが進みましたが、そこで大きな壁にあたり、なかなか意見が出ませんでした。

しかし、「本当の宗教とは何か」という問いはとても重要な問いです。ですので、簡単に答えの見つかる問いではありません。むしろ、この問いは、連研全体に通じる大きな問いだと言えるでしょう。受講者の皆さんには、この問いを心のどこかに持って、研修を進めて欲しいと思います。

第十七回五位組 子ども大会について

西福寺 豊原正靖

今年の子ども大会は辻の西福寺で行われました。子どもたちを中心に六十名を超える人たちが集まり、大いに盛り上がりました。例年通り、お勤めから始まりゲーム、BMXショー、紙芝居、



辻の西福寺

仏教讃歌指導の流れとなりました。

今年の特色としては、ケバブ屋さんに来てもらい、ケバブとトルコアイスを提供したこと。それと、BMXショーの出演者が小学四年生のミナト君とリュウタ君、中学二年生のリム君といった若い世代が中心で子ども大会の名にふさわしいショーになったと思います。

ミナト君は神戸からご家族で参加。ミナト君のお父さんは、お寺でこのような子ども会を十七年も開催していることに驚いていました。神戸のお寺は、震災の影響もあると思いますが、ビル型が多く事務所や待合室があったりと、富山のお寺とは少し違うようで、初めて本堂や庫裏で遊べたことに感動し、地域密着型な富山のお寺に驚いていました。

そんな新たな交流も生れた今年の五位組子ども大会。改めて自分たちのお寺を見つめ直す良い機会になりました。

自坊紹介

廣谷山 西光寺

高岡市 麻生谷



西光寺の初代了順は一二六八（応安元）年、山川に天台宗として草庵を結びますが、一三九〇年頃には、綽如上人に帰依し浄土真宗に改宗しています。やがて山川から西広谷に移転し、一四五三年に現在の麻生谷に移転しています。残っている記録から現在の住職（了文）は十八代となりますが、初代了順から二代了順までの一七五年間の記録が失われているため、実際には更に六、七代は多いだろうと思われます。

一九六一（昭和三六）年に十七代住職（憲文）が石堤保育園を設立し、保育園のあるお寺として地域の方々から親しまれております。

十七代憲文、現住職十八代了文は本願寺にも奉職させていただき、ご門徒の方々にはご迷惑をおかけすることもありましたが、五位組寺院のご住職方、ご門徒の方々に支えられながら、法灯相続を続けております。



報 恩 講 ご 案 内

各寺院の日程順に記載してあります

石堤 法善寺

九月二十六日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 九月二十七日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 氷見市脇 寺西 良夫 師
 ※二十七日には祠堂経法要

上向田 浄永寺

十月三日 昼 一時三十分
 十月四日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 小矢部市西中 平野 信教 師

赤丸 性宗寺

十月十一日 昼 一時三十分 夜 七時
 十月十二日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 射水市市井 公文名 眞 師

四日市 浄明寺

十月十四日 昼 一時三十分 夜 七時
 十月十五日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 射水市市井 公文名 眞 師

中保 善教寺

十月十六日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 高岡市泉町 現影 顕正 師

辻 西福寺

十月十六日 昼 一時三十分
 十月十七日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 高岡市伏木 山名 一徳 師

立野 永念寺

十月二十日 昼 一時三十分
 十月二十一日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 福岡町土屋 山岸 智史 師

三日市 光源寺

十月二十二日 昼 一時三十分 夜 七時
 十月二十三日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 福岡町土屋 山岸 智史 師

本保 本正寺

十月二十六日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 高岡市内島 岡西 法英 師

佐加野 光明寺

※本堂修復の為、休座
 ※平成二十八年 五月二十八・二十九日に
 落慶法要の予定

内島 教願寺

十月三十日 昼 一時三十分 夜 七時
 十月三十一日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 高岡市佐加野 磯原 孝雄 師

石堤 長光寺

十一月一日 昼 一時三十分
 十一月二日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 十一月三日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 氷見市布施 圓山 望 師

笹川 廣濟寺

十一月五日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 十一月六日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 高岡市伏木 山名 一徳 師

麻生谷 西光寺

十一月七日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 十一月八日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 石川県輪島市 節談説教 廣陵 兼純 師

山岸 珉照寺

親鸞聖人七五〇回大遠忌法要、
 蓮如上人五〇〇回遠忌法要、
 開基祖五五〇年慶讃法要
 十一月十四日 昼 二時
 十一月十五日 朝 十時 昼 二時
 法話 射水市市井 公文名 眞 師

舞谷 永賢寺

十一月二十三日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
 法話 富山市婦中町 竹中 了祥 師

どうぞお誘い合わせの上、お参りください。
 詳細については、各寺院にお問い合わせ下さい。

平和への道とは

珉照寺 山岸智史

現在、国会で安保関連法案が審議されています。この法案が参議院で審議されるようになると、周りの国に攻め込まれない抑止力として、この法案は必要だ」という声が聞かれるようになりました。つまり、日本の平和を守るための軍事力（集団的自衛権、日米同盟）を強化する為に、この法案を可決させたいということです。

抑止力、平和を守る為の軍事力」。この言葉に向き合う時、私は釈尊の言葉を思い出します。それは 武器に頼ろうとするから恐怖が生じる」という言葉です。私たちが武器（軍事力）に頼ろうとするから、相手は恐怖を感じ、武器を持つ。すると、私たちもまたそれに恐怖を感じ、さらに武器を持つ。その繰り返しです。最後には、その恐怖を打ち消す為に相手を攻撃するかもしれません。それが本当の平和への道といえるでしょうか。本当の平和への道とは、武器を持たず、対話を通して粘り強く信頼を構築していくことではないでしょうか。

この対話による信頼構築という道は、もう一方の抑止力になります。それは、私たちが他国に侵略し、その国の人々を殺さない為の抑止力です。私たちが武器（軍事力）を持つということ、私たちが他国に侵略し殺害する可能性を手にするということ、私たちが武器（軍事力）を持った時、それを使わないという保障がどこにあるのでしょうか？縁によって、どんなことでもしてしまうのが私たちだと、親鸞聖人は仰っておられます。私たちが他国を侵略し傷つけない為にも対話による信頼構築ということが大切なのです。

私たちの教団は、先の大戦において、戦争に協力してきたという悲しい過去があります。過ちを繰り返さない為にも、この国の行く末について無自覚・無関心にならず、考えて行動することが求められています。

◆◆◆ 五位組行事予定 ◆◆◆

ビハラー研修会

二〇一六年（平成二十八年）
一月二十六日 午後七時

門徒総代会研修会

二〇一六年（平成二十八年）
二月二日 午後二時
長光寺にて

実践運動研修会

二〇一六年（平成二十八年）
二月十七日 午後三時
長光寺にて

歴史講座

二〇一六年（平成二十八年）
三月十三日 午後七時
長光寺にて

第十一期連続研修会（連研）

毎月第二月曜日、
午後七時より

編集後記

五位組だよりを発行してから五年がたちました。十人十色と言う言葉があります。それぞれ自分の色を持つて五年前に集まった門徒推進員、特に知識、技術もなく編集委員として五位組だより作成に努めました。山岸さんを中心として原稿を一語一語読み、内容を協議し、おかげさまで、今回で、十一回発行できました。これから、皆様方のご意見、ご感想をお待ちしております。

合掌